



TITLE:

李悝の平糴法に就いて

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

---

CITATION:

穂積, 文雄. 李悝の平糴法に就いて. 経済論叢 1941, 53(5): 526-537

ISSUE DATE:

1941-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/131613>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號五第 卷三十五第

月一十年六十和昭

## 論 叢

普通銀行及特殊銀行の金融統制……………

經濟學博士 小島昌太郎

國家資本の諸問題……………

經濟學博士 谷口吉彦

江戸時代の經濟機構……………

經濟學士 堀江保藏

李悝の平糶法に就いて……………

經濟學士 穗積文雄

法幣爲替の補強工作……………

經濟學士 徳永清行

## 時 論

戰時下における水産業……………

經濟學博士 蜷川虎三

## 研 究

古代猶太共同體の形態……………

經濟學士 澤崎堅造

## 說 苑

下請制工業と社會的分業……………

經濟學士 田杉競

出產統計に於ける季節的變動……………

經濟學士 青盛和雄

## 附 錄

叢 報

外國雜誌論題

## 李悝の平糶法に就いて

穂 積 文 雄

漢書食貨志上には李悝が魏の文侯に説けるところとして有名なる平糶の法が引かれてゐる。次の如くである。

善平糶者、必謹視歲有上中下孰、上孰其收自四餘四百石、中孰自三餘三百石、下孰自倍餘百石、小飢則收百石、中飢七十石、大飢三十石、故大孰則上糶三而舍一、中孰則糶二、下孰則糶一、使民適足賈平則止、小飢則發小孰之所斂、中飢則發中孰之所斂、大飢則發大孰之所斂、而糶之、故雖遇飢饉水旱、糶不貴、而民不散、取有餘以補不足也。

先づ孰(熟)と同じ、(豐年)の場合政府が糶(買ひ上げる)する額に就ては早く張晏が次の如き詳しい註を施してゐる。

平歲百斛收百五十石、今大孰四倍、收六百石、計民食終歲長四百石、官糶三百石、此爲糶三舍一也。自三、四百五十石也、終歲長三百石、官糶二百石、此爲糶二而舍一也、自倍收三百石、終歲長百石、官糶其五十石、云下孰糶一、謂中分百石之一。\*

張晏がここに平歳の收穫を百五十石とせるは、この平糶論に入る前、李悝が文侯に農民の窮狀を訴へその消費生活を分析するところで

今一夫挾五口治田百畝、歲收畝一石半、爲粟百五十石\*\*

といへるに據るものと考へられる。そしてこの張晏の説明で李悝の平糶法の糶の數量は容易に理解ができるやうになる。然るに今この張晏の註を明瞭の爲に數式に表はすと次の如くなる。

	平歲ノ收	自家用	上糶	舍
大 熟	$150石 \times 4 = 600石$	$200石 = 400石$	$300石 + 100石$	
中 熟	$150石 \times 3 = 450石$	$150石 = 300石$	$200石 + 100石$	

\* 漢書、食貨志上、  
\*\* 同上、

下 籾  $150石 \times 2 = 300石 - 200石 = 100石 = 50石 + 50石$

そしてこの表に就いて見ると中熟の時の農家の自家用は百五十石であるのに小熟の時の農家の自家用は二百石で、中熟の時よりも小熟の時の方が農家の自家用の量が大であることが眼につく。勿論それは數式に表はさずともわかるべき筈ではあるが、食貨志の原文でも、張晏の註でも奇妙に農家のこの自家用の數量は出て居らぬ。それはともかく、かく中熟の場合よりも小熟の場合の方が農家の自家用が大であるといふことは果して穩當な事象として承認されるであらうかと問題とならねばならぬのではあるまいか。これに對して或は支那に於ては收穫の少い時の方かへつて農家の自家用を大に認めてやるといふやうな一のイデオロギイが爲政者にあるといふ辯が爲されるかも知れぬが、それでは大熟の時の農家の自家用として認むところは二百石であるのに中熟の時のそれが百五十石となつてゐるのはどう説明せらるべきであらうか。しかのみならず、この自家用以外の一部はまた自家に復歸するのであり、その糶せられる部分に就いて見るも、そもそも糶するといふのは米を買ふことであつて無償で徴收することではなく、こゝでは、豊年で米の供給量がで、米價が下落し、農家が困窮するのを救済する爲に、政府が米を買ひ上げることであると解すべきものであつて見れば、收穫大なる時よりもその小なる時に農家の自家用を大にするといふイデオロギイは全く何のことか理解できぬことになるのではあるまいか。それで大熟の時の農家の自家用として認められるものは二百石で、中熟の時のそれは百五十石といふのは別に怪しむに當らぬ極く自然なことも考へることができるかと思はれ、たゞ小熟の時のそれが二百石となつてゐることがおかしく感ぜられることにならねばならぬ。然しそれに就いては必ずしも張晏のみを責めるわけにはゆかぬであらう。何となれば、先にもふれるところあつた如くそれは漢書の本文それ自身に基因して居り、張晏はたゞその本

文に忠實に従て、それを説明せんと試みてゐるのに過ぎぬからである。それで問題は漢書の本文「下孰自倍餘百石」が果して誤なきやといふこととなる。

然し長い間の張晏の註は支配的であつた。人々はこの點を問題とすることなくして過ぎて來た。少くとも吾々はこの點を問題として採りあげた人あるを殆ど聞くを得なかつた。然るに中國經濟思想史の著者唐慶増氏に至り、吾々は始めてこの點を問題とする人を見ることとなる。

即ち氏は前掲李悝の平糶論を引いて、その「下孰自倍、餘百石」のところに至るや、括弧して、

接當爲百五十石、原文有誤、\*

とし、さらに數式に於て、

下孰 平糶收 150石 今加一倍  $150 \times 2 = 300$ 石 用150石餘150石\*\*

とし、從て「下孰則糶」を説明して

下孰 上糶一 150石—100石=50石 政府下孰時買進之石數\*\*\*

とする。

かく唐慶増氏がこの點に疑を挟まれたことは大に敬意を表するに足る。そして進んで漢書の原文に誤ありと斷ぜられるのも暫らく問題とすまい。然し、然らばその誤を如何に正すかに於て、農家の自家用を百五十石とせられるに至りては私は贊意を表するを得ぬのを遺憾とする。

唐慶増氏は中熟に於けるよりも小熟に於ける方農家の自家用の量が大なるは不合理とせられるが故に小熟に於ける農家の自家用を百五十石とせられるのであらうが、それなら何故一步を進めて小熟に於ける農家の自家用を

\* 中國經濟思想史、一九三六年、上海、二五二頁。

\*\* 同上書、二五三頁。

\*\*\* 同上書、二五四頁。

以て中熟に於けるそれより小とする方がより合理的と考へられないのであらうか。大熟の場合よりも中熟の場合の方農家の自家用を小とすることを承認しながら何故小熟の場合は中熟の場合と同一であるべきものとせられるのであらうか。思ふにそれは先にも述べたる如く、李悝は農家の例を一夫五口を挾んで百晦の田を治め、平歳の收穫百五十石として居る故、農家の自家用はこの百五十石以下なるべからず、熟の場合はこの平歳の收穫たる百五十石だけは少くとも排除して然る上に於てその剩餘の一部を政府が買ひ上げると爲すべき筈であると考へるのに因るのであらう。然しそれが正しいであらうか。李悝によれば平歳百五十石の收穫の中、一家五口が實際に食ふのは僅に九十石であり、後の六十石は中十五石を税として納める外はこれを賣却して、得たる錢にて食料以外の諸掛を支拂ふとすること次の如くである。

除十一之税十五石、餘百三十五石、食人月一石半五人終歲爲粟九十石、餘有四十五石、石三十爲錢千三百五十、除社閭并新春秋之祠用錢三百、餘千五十、衣人率用錢三百、五人終歲用千五百、不足四百五十、\*

それで、自家用は必ずしも百五十石を要せぬのではないか。百五十石以下でも敢て差し支へないのではないか。是非とも百五十石自家用として確保せねばならぬことにはならぬと思ふがどうであらうか。さういへば百五十石でさへ農家は錢四百五十不足する勘定になるのだから、必ずしも百五十石以下でよいとはいへぬといはれるかも知れぬ。然し、平歳の收穫を百五十石としながら、百五十石では家計が成り立たぬとすることが抑も不合理で、それでは熟の場合はよいとして何時も熟とは限らぬのであるから、そして結局は長い期間に亘つて平均値をとれば平歳に落ち付く筈であり、平歳はそれ故にこそ平歳であり得る次第とせねばならぬのであるから、かくの如き前提でこの平糶論を展開するわけには行かぬ。そのことは李悝自身、大飢、中飢、小飢にはそれぞれ、大熟、中熟、

\* 漢書、食貨志上、

小熟に糶したるところを發してこれに善處すべきことを説きながら、平糶に關しては何等の救済策を論じて居らぬによつてもわかるであらう。それでは平糶百五十石でも農家が尙錢四百五十不足することは如何にして解決するかといふことになるであらうが、この場合、李惺の生産政策たる「盡地力」は問題とならぬ。何となれば「盡地力」即ち治田勤謹にして收穫が増加すれば、百晦の收百五十石といふ前提が壞れ、盡地力を阡陌の廢除、耕地整理と解するとしても亦百晦の田といふ出發點と抵觸することとなるからである。勿論、李惺が治田勤謹即ち、盡地力の教を放棄するといふのではない。ただこの平糶論に於ては既に平糶出百晦より百五十石の收穫ありとの前提より出發するものである以上、その理論は一應その出發點より展開することに於て成り立たしめねばならぬといふだけである。さうするとこの問題は一體如何に解決せらるべきであらうか。思ふにこの不足は百五十石の收穫より、租税十五石、食料九十石を控除した殘額四十五石を賣却して得る代金たる錢數が不足することに外ならないのであるから、それは穀價低廉に失する故であると爲し得るわけであり、それ故これが解決は穀價調節に俟つべきものであり、そしてそれこそが實に平糶の重要な使命に合する次第であらうと思ふ。そしてかくて政府が穀價調節の爲に、粟を買ひ上げて呉れるのであるから農家の自家用の量は九十石でも足りることになるともいへるのであるから、それが百五十石以下ではならぬといふことにはならぬのではないか。況や、さらに自家用を控除した残りを二分してその一を再び農家に返却するに於ておや。然り、漢書の本文には上掲の如く、「下穀則糶一」とあり、それは張晏の註する如く二分の一を糶することであり、何に就いての二分の一かといへば全收穫三百石より自家用の量を控除せる殘額に就いてでなければならぬ。現に唐慶增氏も下熟の全收穫より農家の自家用を控除したる殘額に就いてその一部を政府が買ひ上げるとして居られることに前に引けるところの如くである。

然るに唐慶増氏はその残額の一部を政府が買ひ上げるとせられるのはよいが、それを二分の一とはせられず、残額百五十石の中の百石とせられてゐる。これ明らかに誤りでなければならぬ。もつとも唐慶増氏は

上 上糶三舍一 400石—300石=100石(餘一)政府在上熟時買進之石数

中 上糶二 300石—200石=100石 政府在中熟時買進之石数

下 上糶一 150石—100石=50石 政府在下熟時買進之石数\*

とせられてゐるところを見ると、「糶三而舍一」の「三」「一」はそれぞれ三百石、百石を指すものとせられ同様に中熟に於ける「糶二」の「二」は二百石、下熟に於ける「糶一」の「一」は百石を指すものとせられるのではないかとも思はれる。然しながら、「上糶三而舍一」は四分の三を糶して四分の一を舍つるといふことであり、既に「上糶三而舍一」の句がある時は、以下は文章を簡略化して、「上糶二而舍一」、「上糶一而舍一」即ち、それぞれ、上三分の二を糶して三分の一を舍つ、上二分の一を糶して二分の一を舍つ、とすべきところを、それぞれ、「糶二」、「糶一」とせるものと解すべきものなることは狩野直喜先生より親しく御教示を賜はつたところで、唐慶増氏の讀み方には無理があると斷せざるを得ぬと思ふ。

それで唐慶増氏が長い傳統を破りて張晏の註に満足せず、進んで漢書の本文に疑を挟まれこれを問題として採り上げられたるは尊敬措く能はぬところであるが、その説遂に誤に代ふるに誤を以てせられたるに過ぎざること猶ミイラ採りがミイラになりたるが如きは惜しめてもなほ餘りあるところといはねばならぬ。

近ごろ私はこの問題に就いて一の新しい説を見た。即ち梁啓超がその「先秦政治思想史」に於て、特に「生計問題」の章を設けて漢書食貨志に引かれたる李悝の經濟思想の全文を掲げて居り、そして重澤俊郎教授はこの書

\* 同上書、二五三—二五四頁。



を平易明快に邦譯せられたが、たまたま、吾々が今問題とするところに於て張晏の註と全然異なる一の新しい解釋を提供せられることになるのである。教授の謙讓なる

無數に引用された古典に至つては其の失甚しきを憂へてゐる。御叱正を得れば幸ひである。\*

といつてゐられるのに、今ここにかうして問題とするのは或は禮を失せざるやを恐れはするが、それは一の示唆に富む解釋であると思はれるから敢てここにとりあげることを許していただきたい。教授の譯によれば、

大熟の歲には政府は農村各戸の全收穫中から四分の三を買ひ上げて其の一を残し、中熟の歲には三分の二を買ひ上げて其の一を残し、下熟の歲には二分の一を買ひ上げる。云々\*

となる。即ち教授は「大熟則上糶三而舍一、中熟則糶二、下熟則糶一」はそれぞれ、四分の三、三分の二、二分の一を糶することに解して居られるけれども、その分かつ基本をそれぞれ大熟、中熟、小熟の全收穫として居られる。それで今暫らくこれを數式に表現して見ると次の如くなる。

全收穫上糶 農家の自家用

大 熟	$150\text{石} \times 4 = 600\text{石} = 450\text{石} + 150\text{石}$
中 熟	$150\text{石} \times 3 = 450\text{石} = 300\text{石} + 150\text{石}$
小 熟	$150\text{石} \times 2 = 300\text{石} = 150\text{石} + 150\text{石}$

そしてこの數式に於て明に看取せられることは、大熟、中熟、小熟の別なく平歲百五十石以上の收穫は全部政府の買ひ上げるところとなり、農家の自家用は何時もただ平歲の收穫に當たる百五十石だけに限られてゐることである。農家の自家用が必ずしも大熟、中熟、小熟によりて異らねばならぬ理由はなく、平歲の收穫を確保すれば足るわけではなければならぬとすれば、これは論旨極めて明快、且つ理論的にも難すべき點を見ぬといはねばなら

\* 重澤俊郎譯、先秦經濟思想史、譯者の序、九頁。

\*\* 同上書、三三八頁。

ぬかと思ふ。ただ然しながら、それでは「上孰、其收自四餘四百石、中孰自三餘三百石、下孰自倍餘百石」が何のことやらわからなくなるのではないであらうか。全收穫六百石から四分の三を羅するとすれば、どうして四百石を餘すことができようか。それでこの解釋は非常に論理的ではあるがこの全文の解釋上はやはり張晏の註を無視するわけにはゆかぬことになると思ふ。

それでは、張晏の註によらうとすれば、下孰に於ける農家の自家用が二百石となり中孰に於ける農家の自家用よりも大であるといふ難關に逢着すること既に論じたるが如くであり、それは、實に漢書の本文に「下孰自倍、餘百石」とあるをそのまま承け入れ、専らそれにつちつまをあはせやうと努むることなほあだかも、シエクスピアに間違なしとして何とかこぢつけんと思ふ。それで暫らく私見を開陳することとする。

それではこのところは一體如何に解すればよいのであらうか。今や私は自分の考ふところを述べるべき位置に在る自分を見出すかと思ふ。それで暫らく私見を開陳することとする。

先にも論じたところであるが、私はやはり、下孰に於ける農家の自家用の量は中孰に於ける農家の自家用の量よりも小なるべきこと、なほ中孰に於ける農家の自家用の量が上孰に於ける農家の自家用の量よりも小なるが如くあるが穩當ではないかと思ふ。それではそれは幾何かといへば私はそれは百石であるべきだと思ふ。従て漢書の本文を訂正するとすれば「下孰自倍、餘百石」が「下孰自倍、餘二百石」となればよい。それでは何故そうするがよいかはその場合に成り立つ數式を見れば容易にうなづかれるかと思ふ。それで先づその數式を示せば、「下孰自倍、餘二百石」即ち、下孰に於ける農家の自家用としての控除額を百石とすれば、そこに成り立つ數式

は次の如くである。

## 平糶ノ収獲全收獲 自家用 上糶 金

大 熟  $150石 \times 4 = 600石 - 200石 = 400石 = 300石 + 100石$

中 熟  $150石 \times 3 = 450石 - 150石 = 300石 = 200石 + 100石$

下 熟  $150石 \times 2 = 300石 - 100石 = 200石 = 100石 + 100石$

即ちそれに於ては、大熟、中熟、小熟の別に従つて、それぞれ平糶の四倍、三倍、二倍、六百石、四百五十石三百石と全收穫が遞減し、それに應じて農家の自家用控除額は二百石、百五十石、百石と遞減し、そして政府の買ひ上げ額も亦三百石、二百石、百石と遞減し、農家へ復歸する額は必ず百石を確保する、或は全收穫よりそれの控除額を引き去りたる殘額中農家には必ず百石だけを残してその餘を政府が買ひ上げるから熟の上中下に從て、その買ひ上げ額が三百石、二百石、百石となるといつてもよいであらうか。そして先に唐慶増氏の所論を評する場合に述べたところよりして既に明らかであらうとは思ふが、この自家用が百石ではそれは平糶の收穫よりも小となるではないかといはれるならば、この場合、農家はこの百石の外にその控除後の殘額の二百石の二分の一の百石が、復歸し合せて二百石、更に之に加ふるに政府買ひ上げの二分の一の百石の代金がいづて來るわけであるから、そのやうなことは憂ふるに當らぬ、それこそ杞憂でなければなるまい。又、唐慶増氏のいふ如く漢書の本文が誤りに陥るとしても「下孰自倍、餘百五十石」が誤つて「下孰自倍、餘百石」となるよりは、「下孰自倍、餘二百石」が誤つて「下孰自倍、餘百石」となる方蓋然性が高いのではないであらうか。

それでは漢書の原文に「下孰自倍、餘百石」とあるは、もと「下孰自倍、餘二百石」とあつたものが、何時の間にか「二」が脱落したものであり、そして張晏はその誤つた本文に據り誤つたままの本文を承け入れてそれを

説明すべく註をつけたものであると斷すべきであらうか。

勿論、支那の古典には長い傳來の中途に於て誤寫脫落を生ずること稀ではなく、そこに考證、校勘の存在理由があり、古版本が單なる骨董價值だけでなく實質價值を有つ所以であり、そして漢書のテキストのみ獨りその例外なりとする根據はなく、「二」が脫落しなかつたとは確言すべき限りではないであらう。

然しこの「二」が脫落したと斷言し得る爲には「二百石」となつてゐる古版本による外なくこれなくばどこまでも推定に終るの外ないのであるが、そのやうな版本は未だ嘗て發見せられて居らぬやうである。それどころか漢書の作成せられたのは後漢の時代であり、張曼の生活したのは魏の時代で、その間の期間は極めて短く、そして期間の短いといふことは脫落の可能性を稀薄にすること狩野博士の説かれるところの如くである。<sup>\*</sup> してみると漢書のテキストに傳來途上脫落を生ぜりとするは差し控へるに如かずといふことにならねばならぬ。

然かしながら漢書傳來途上脫落を生ぜず最初より「百石」となつてゐたとしても、李悝は「二百石」としてゐたのを始から間違へたのであるかも知れぬ。少くともそうでないと斷定することはできぬであらう。

然しそれは李悝は「二百石」としてゐたといふことを前提として始めて成り立つ。然るに李悝の書は今日亡佚して傳はらず、否李悝と李克が同一人なりや否やさへ尙決せざる有様で、甚しきは李悝の平糶論を以て假託に出づとする説さへある。<sup>\*\*</sup> 李悝本人が百石としてゐたか二百石としてゐたかは今日に於て尋ねべき由もない。

それで漢書のテキストに脫落ありとは最初よりのそれにしる傳來上のそれにしる、輕々に斷ずるを許さぬ。ただ吾々のいひ得るところは「二百石」とすれば李悝の平糶法がより明快となる如く思はれること先に述べたところの如くであるが故に、漢書のテキストに脫落あるか、然らざれば李悝の原文——實在するとすれば——に誤が

<sup>\*</sup> 狩野直喜先生、談話、  
<sup>\*\*</sup> 西田保氏、漢代の漕運と常平倉の設置、(池内博士、還曆記念東洋史論叢、六一五頁。)

あるのではないかとの疑を存するといふことに止まる。

服部宇之吉博士が李愷の平糶を論じ、その豊凶共に收穫増減の割合過大に失するの疑有りとせられるとともに

且つ豊年に買ひ上ぐる額の計出法にも疑點有りと雖も、今暫く漢志の文を録して疑を存し云々

と述べて居られるのも、蓋しその意ここにあるのであらう。

次に熟に糶するは飢に發する爲でもあることは改めて論ずるまでもないが、「小飢則發小孰之所斂、中飢則發中孰之所斂、大飢則發大孰之所斂。」といふのは何を意味するかは問題であり得る。換言すれば「發小孰之所斂」「發中孰之所斂」「發大孰之所斂」といふのは、それぞれの糶したところの全額を發するかどうか問題となり得る。そして理論の構成からいへば全額を「糶」(出賣)するとすることができればこれに越したことはないと思はれる。然し、そう解することは出来ぬのではないかと思はれる。蓋し若しそうすれば、大飢、中飢、小飢によりて粟の供給量が區々であり、而もその何れに於ても粟の供給は平糶を遙に越え、穀價餘りに下落して平糶の主旨に反する恐なしとせぬからである。即ち今暫らくこれを數式に表現すれば次の如くである。

小 飢	$100\text{石} + 100\text{石} = 200\text{石}$
中 飢	$70\text{石} + 200\text{石} = 270\text{石}$
大 飢	$30\text{石} + 300\text{石} = 330\text{石}$

然らば、その「糶」する量はどれだけであらうかが問題となるであらうが、それは飢饉の歳には穀の供給量減少するが故にその價格が騰貴するが、今斂藏するところを「糶」すれば供給量増加して價格は低下する、そしてそれが平常のところに達したところで「糶」は打ち切られると解すべきである。まことにかくしてこそ平糶の名に背か

ず、さればこそ、「糶」の場合は「糶」の場合の如くその量を規定することなく「小飢則發小孰之所斂、云々」といふのであらう。そして熱の場合にいへるところの、「使民適足買平則止」はこの飢の場合にも適用されるところであり、それは既に熱の場合にいつてあるので飢の場合には省略されてゐると解してよいであらう。(註)

然しさういふと、それが飢の場合に適用されるのは問題ないとして、それが、熱の場合にいはれてゐることは熱の場合に於ては糶する分量が前述の如く細かに規定されてゐるのであるからおかしなことになつて來ねばならぬと考へられる。そこで結局、前述の糶の數量は必ずしもあの通りを嚴守するわけではなくして、先づ大體の目安、行き方を指示したもので、要は買(價格)の平らかなるに在るわけで價格平らかとなればそこで政府の買ひ上げも打ち止められたとせねばならぬかと思ふ。さすれば先にあれだけ論じたことも理論としてはともかく、實際に於てはそれほどの重大問題でないといふことになるかも知れぬ。

註 飢が續けば熱に斂するところの全額を以てしてもなほ買を平らかにするに足らぬ場合のあり得ることも考慮の中に入れる必要はあるであらう。

(本稿を草するに際し、狩野直喜博士の御教示を辱うするを得たることは筆者の光榮とするところである。謹んで深謝の意を表する。)